

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行
第2回業務推進全体会合
逐語録

(木村^浩) それでは、第2回の業務推進全体会合を始めたいと思います。

まず、資料を確認して、番号を振りたいと思います。一番上に議事次第があると思います。2-0でお願いします。次に、第1回業務推進全体会合の議事録案です。2-1でお願いします。次に、一昨日に実施したシンポジウムの資料一式をおつけしました。4月から今までで何をやってきたかということがかなりコンパクトにまとまっていますので、今日はこちらを使って説明しようと思います。この一式で、2-2でお願いします。最後に、業務計画書です。進捗が分かるように少し変えてあります。2-3でお願いします。今日の資料は以上ですが、いかがでしょうか。

それでは、議事にしたがって進めてまいりたいと思います。

5月から7月のフォーラム、そして16日はその成果報告会ということで、シンポジウムを実施しました。ご協力いただき、ありがとうございました。台風直撃ということで、予定より参加者は減ってしまいましたが、なかなかいいディスカッションができたし、締め の諸葛先生の挨拶もすばらしかったですし、いいシンポジウムになったと思っています。どうもありがとうございました。

0. 議事録確認

(木村^浩) それでは、今日の議事に入りたいと思います。まずは議事録確認です。第1回の議事録案、逐語録は、すでにメールでお送りしておりますので、何か気づいたところがあれば、ご連絡いただければと思います。

簡単に前回の議論の内容をお話ししますと、平成24年度の業務報告をし、平成25年度の計画をお話したということになります。5月31日ということで、第1回フォーラムが終わった時点でしたけれども、その段階での業務計画の説明をしたということです。

ということで、そこから何を進めたかということ、この後お話ししていきたいと思っ ます。

1. フォーラム・シンポジウムの報告

(木村 浩) 続いて、議事の1番、フォーラム・シンポジウムの報告ということですが、時間の関係もありまして、詳しいお話は後に回そうと思っています。今は概要をお話して、その後、他の議題を先にやります。それが全て終了した後に、シンポジウムの資料を使って、詳しく説明したいと思います。

議事次第に概要をまとめましたので、ご覧いただければと思います。

まず、フォーラムは、全5回無事に終了することができました。5月25日から始めて、隔週の土曜日ということで、6月8日、6月22日、7月6日、7月20日に実施したということになります。

また、先ほども言いましたけれども、シンポジウムが9月16日に武田ホールで開催されました。

また、原子力学会の秋の大会でも発表をしまいいりました。研究発表は、竹中君と私が1件ずつ。また、総合講演・報告ということで、社会・環境部会と共催して、「「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション」ということで、竹中君と土田先生と私で話してきたということです。こちらはかなりの人数が集まりまして、150人くらいはおそらくいたかと思います。

シンポジウムはフォーラムの実施紹介でしたけれども、学会のほうは、学問的な話を中心に話を進めました。竹中君は、新聞報道の中で「原子カムラ」という言葉がどのように扱われているのかということ、グループダイナミクスという観点から分析して、それをお話ししました。土田先生は、首都圏住民と原子力学会員とのギャップを、社会調査を踏まえてお話ししました。こちらについては、今日もご紹介いただこうと思います。そして私からは、このフォーラムの取り組みを紹介したということでした。

ということで、フォーラム、シンポジウムの内容については、一通り終わった後にお話ししたいと思いますけれども、現在のところ何か確認しておきたいことはありますか？よろしいでしょうか。では、細かいところはまた後ほど、資料を使いながらやりたいと思います。

2. 今後の予定

(木村 浩) 次は議題の2番、今後の予定です。資料2-3をご覧ください。こちらは第1回の会合の中でもお示ししましたがけれども、今年度実施する業務内容が書かれている文書になります。これの中に少しずつ書き込んで、現在どこまで進んでいるのかということが分かるようにしてあります。薄字になっているところが実施済みのところで、まだ黒字のところはこれから実施しなければいけないところということになります。

まず、「(1) フォーラムの試行」という項目です。

「①フォーラムの準備・実施・記録」に関しては、5回のフォーラムを実施し、その記録はホームページに公開済みということで、終了しております。

「②一般公開シンポジウムの準備・実施・記録」に関しては、シンポジウムを実施した、というところまでは終わっております。ホームページの公開は準備中ということで、書き起こして、講演者の方々に確認を取った上で、公開をしていくということになります。また、未回答の質問で、答えておいたほうがいいものに関しては、順次答えてホームページに掲載していこうと考えています。

次の項目、「(2) フォーラム参加者への継続的意識調査による効果測定」は、再委託先の原子力学会にお願いしておりますけれども、アンケートは実施済みです。現在、それを分析中ということで、その一部がシンポジウムの中でも紹介されたということになります。こちらについては、土田先生からご紹介があると思います。

「(3) フォーラムの再設計」。

「①インタビューとフォーラム記録による効果検証」については、参加者に対するインタビューは実施済みです。現在、そのインタビューを分析中です。また、フォーラム記録と併せて分析し、参加者に感じられたフォーラムの効果がいかなるダイナミズム（参加者同士の相互作用）と関係していたかを明らかにする。また、「原子カムラ」の境界を越えられたかどうかという観点から、フォーラムの効果検証を行う、ということについては、これから実施していくということです。

この後の項目は、これから実施していく項目になります。次のページの進捗表とあわせて見ていただければと思いますけれども、表のほうも、9月までは黒く塗ってあります。今のところ、計画通りに進捗しているかなと思っております。

「②フォーラムの改善案の整理と再設計」は、「①インタビューとフォーラム記録による効果検証」が終わった後に、11月くらいから始めるというスケジュールで考えております。

「③フォーラム参加者選定」に関しては、社会調査後に実施するというので、2月から3月を予定しています。

「(4) 社会調査の実施」。シンポジウムが終わって、この研究プロジェクトの第一ターンが終わりました。昨年度後半からこの事業が始まりましたけど、そのプロセスを、もう一度見直ししながら進めて、よりブラッシュアップすることがこれからの事業になります。

そういう意味では、社会調査の実施はこの研究としては2回目ということになりますが、昨年度は設計でしたけれども、今年度は「①調査項目の再設計」ということで、今回のフ

フォーラムを踏まえて、どういうことを聞いておいたほうがいいのかということを考えて、調査票を再設計していきます。また、フォーラム参加者をいかに呼び込むかということに関しても、設計をしなければなりません。そういった業務が、この「調査項目の再設計」に入ることになります。

「②市民および専門家への社会調査の実施」は、例年と同じ規模で考えています。首都圏住民 500 名規模、原子力学会員 500 名規模を目標に、調査を実施していくということになります。また、実施時期は 1 月を目標にしていきたい。そうすると、12 月の中旬には調査票を確定して、輿論科学協会さんをお願いしなければいけない、ということになります。

「③フォーラム参加者への意識測定項目の再設計」は、おそらく「①調査項目の再設計」とも連動するのですが、今回のフォーラムを経て、どういうところをさらに聞いておけばよかったかということ踏まえて、再設計をすることになります。

今までは、どちらかといえばフォーラム研究会主体で動いてきた業務ですが、今後、調査が中心になってくると、学会の特別専門委員会が主体となって動いていくことになると思います。今後の業務推進全体会合のタイミングとか、そういうところでも少しご相談が必要かなと思っています。

「(5) 情報共有および成果の取りまとめ」。これは NPO と学会と合同でやるものですが、業務推進全体会合で共有するという話、学会で発表するという話が含まれております。それから、ホームページを作ることも含まれますが、それは粛々と続けているということです。

「(6) 外部評価」ですが、今年度は年度中期・最終の 2 回で、外部評価委員会を開催するというので、10 月 31 日、および、3 月 17 日に実施予定ということで、もうお願いをしております。なお、フォーラムの最終回に、数名の外部評価委員の方がいらっしゃっていただきました。また、シンポジウムにも 1 名の方が来ていただきました。

ということで、今までの進捗と、今後何をやるかということの概要を整理しております。ここまでに、不明な点、確認しておきたい点があれば、お願いします。

—— 外部評価委員会は、10 月 31 日はフォーラムの内容を説明するわけですね。

(木村_浩) はい。

—— 3 月 17 日は、これから行なう調査の報告が主になるということですね。

(木村_浩) はい。あとは、フォーラムの再設計の話もすることになります。

おそらく、1 回目はフォーラムが中心的な話題になり、2 回目は調査が中心的な議題にな

と思います。

他にございますか？ よろしいでしょうか。

3. その他

(木村 浩) そうしたら、3 番目の議題に進みます。今の業務計画を受けて、第 3 回、第 4 回、第 5 回の業務推進全体会合のだいたいの目安を書かせていただいております。また日程調整のメールが行くと思いますけれども、ご対応をお願いします。

第 3 回は、10 月後半から 11 月上旬を予定しています。フォーラムの分析の進捗、および、社会調査票のたたき台みたいなものがあれば、そちらについても議論したいと思います。

第 4 回は、社会調査票を確定したい。12 月上旬、遅くても中旬に実施したいと思います。

第 5 回は、翌 3 月ということで、成果の取りまとめの報告をするということになります。

この業務推進全体会合は、原子力学会の特別専門委員会を兼ねて開催していますが、第 3 回、第 4 回は特に特別専門委員会に中心的に関わっていただく議題になりますので、ご協力をよろしく願いいたします。

1. フォーラム・シンポジウムの報告

(木村 浩) ということで、他の議題が終わりましたので、1 番目の議題に戻って、フォーラムの取り組みについて、シンポジウムのお話を簡単に示しながら、意見交換できればと思います。

それでは、2-2 の資料をご覧ください。A3 の 1 枚紙で挟んである形で、その中に 4 つのパワーポイント資料、アンケート、さらに質問を書いてくださいという票がありますけれども、こういう形で資料をお配りしておりました。

プログラムは、最初に私から「研究の趣旨説明」をして、今回のフォーラムの位置づけを明確にしました。その後、「社会調査の実施とフォーラム参加者の決定」ということで、社会調査の結果と、フォーラムの参加者をどのように分析したのかという話を土田先生からいただきました。次に、「フォーラム実施状況の紹介」ということで、竹中君からはフォーラム全体の実施状況、そして鬼沢さんからはサブファシリテーターの立場からのお話をいただいております。その後、参加者からコメントをいただいております。首都圏住民の方 2 名、原子力学会会員の方 1 名に、会場に来ていただいて、それぞれ 5 分ずつお話をいただいたということになります。

後半はパネルディスカッションということで、最初に谷口先生から研究に対してのコメントをいただきました。その後は会場からの質問に答えていきました。休憩中にこの質問

票に質問を書いてもらって、回収して、それに答えていったということです。最後に、今後の抱負を話して、閉会挨拶を諸葛先生にお話しいただいたというような形で、シンポジウムを進めてまいりました。

このシンポジウムが、フォーラムをどのように実施したかということが一番よく紹介しているものですので、こちらの説明をして、ところどころディスカッションをしていきたいと思います。

①研究の趣旨説明

(木村^浩) (スライド1) まずは、私からご説明します。このプロジェクトの位置づけを示すために、研究の趣旨説明をしました。

(スライド2) まずは確認のために背景的な話からいきたいと思います。「中心的な話題は何か？」ということですが、福島第一原子力発電所の事故後、「原子カムラ」という言葉がたびたび聞かれるようになったと。現に社会から「原子カムラ」と呼ばれているのは事実である。というところがまず背景にあります。

なぜ世間から「ムラ」と認識されるのか。「ムラ」を形作るのは、ムラ内部の凝集力ばかりではなくて、中と外との相互作用によって、その間に境界ができたような状態が、「ムラ」という認識をさらに強めているのではないかと、というような話です。

すなわち、「ムラ」の構造とか、「ムラ」がどういうものかということを取り扱うのではなくて、外から「ムラ」がどう見えるのか、そして、外と中とのギャップが大きくなって、その境界が強まっているのではないかと、ということを取り扱う、ということをお伝えしております。

(スライド3) 次に、なぜ境界に注目したのかということなのですが、いろいろな調査において、原子力が社会からの信頼を大きく失っているということで、信頼の構造のモデルを挙げて、説明しました。

信頼を改善していくには、コミュニケーションが必要なだけでなく、そのコミュニケーションがどうもうまくいっていない可能性があるということです。

(スライド4) スライド4では、信頼を失うことによって、そして、元々ギャップがあることによって、相手の話を聞かなくなるし、コミュニケーションをさせなくなるというようなコミュニケーションの不全を招き、その結果として不信が強まるという悪循環があるのではないかと、ということをお話ししております。

ここで、ムラの中、ムラの外というように、2項対立的に書いていますけれども、これは

分かりやすいためにあえて書いているというような形です。

不信とコミュニケーション不全の悪循環によって、境界というものがさらに強まっているのではないかということを経験的に考えて、それをどうにかしたいというのが研究の目的です、ということです。

(スライド5) お互いが何らかの思い込みをして、お互いのギャップが広がった結果、コミュニケーションの不全と不信の悪循環を招いているのではないかということ。

「原子カムラ」という言葉は、そのコミュニケーションの不全と不信の悪循環を顕著に表し、そしてそれをさらに増していくような装置になっている可能性もあるのではないかと、この「原子カムラ」に着目したということです。

それで、お互いの思い込みによるギャップを「原子カムラの境界」と表現して、この研究では、この思い込みをどう乗り越えていくかを示すことが一番の目的である、と設定しています。

(スライド6) では、どうすれば原子カムラの境界を乗り越えるような仕掛けができるのか。まずは、お互いの思い込みが強まっていく構造を止めることが第一歩であると。「確認バイアス」というのは、そのひとつですけれども、こういう思い込みが強まる構造もあるんだなということです。

これを止めるためにどうすればいいのかというと、おそらくは、お互いのイメージが必ずしも全部(全員)に当てはまるわけではないということを知ることが、この構造を止めることにつながるだろう。この構造を止めないと、コミュニケーションの不全であるとか、その結果としての不信について、どうしようと考えた土壌すら築けないのではないかと、そのための仕掛けを作りたいということです。

(スライド7) このスライドは先ほどのスライド4と同じなのですが、吹き出しに枠をつけてある部分が「思い込みによるイメージ」ですが、これらが必ずしも全員に当てはまらない、ということが分かるような仕掛けにしたいというのが、スライド7で説明したことです。

(スライド8) では、どうしたらいいかということで、方法論の話に移るのですが、伝聞による情報伝達はたぶん使えないということです。こちらが信頼に関わるような情報を出したところで、聞く耳がなければ伝わらないので、もう強制的なコミュニケーションの場を作り、その中で強制的にコミュニケーションをさせることが最低限必要になってしまうだろうということをこのスライドで書いています。

(スライド9) これらを踏まえて、フォーラムの目的と、それが持つべき要件を簡単に整

理しています。

市民と専門家がお互いに尊重することを可能とする仕組みを創り出す。それが「フォーラム」であると。お互いの思い込みによるイメージが必ずしも正しくないことを知って、様々な個人の存在を認める、という状態を目指すということです。本当に小さい一歩なのですけれども、これがないと、おそらくはコミュニケーション、信頼という話にはつながらないだろうなということで、こういうことを設定しています。

それを満たすための要件としては、まずは市民と専門家が対等な立場でのコミュニケーションを通じて、お互いのコンテクストを知り、人となりを理解すること。伝聞では難しいということで、直接のコミュニケーションという手段を取ることが、要件として必要と思います。

(スライド 10) このスライドでは、「尊重」とは何か、という話をしてしています。

信頼の話をするときに、「共感」という言葉がよく使われているのですが、この「共感」という言葉にも実はシンパシーとエンパシーという 2 種類があって、日本語では両方とも「共感」と訳すのですが、この 2 つは違うのですよという話を書いています。

目指すべき共感、そしてそれに基づく尊重は「エンパシー」であって、その人になりきってしまう(シンパシー)のではなくて、その人の気持ちはその人にしか分からないので、自分だったらどう考えるかということで、相手のことを理解しようとすることです。そういう考え方を身につけて、「自分とは異なる考え方もまた真である」というような考えができるようになることが重要なのかなと。つまり、いろいろな人がいて、いろいろなことを言っているけれども、それは誰が正しい、誰が正しくないという話ではなくて、それぞれの価値観があって、正しさがある、ということを確認しよう、というようなことを言っています。そう考えることをよしとする雰囲気を作りたいということです。

(スライド 11) そのための工夫として、2 点挙げています。参加者が公平だと思える場作りをするということ。もうひとつは、冷静な話し合いを導き、その場を客観的に捉えることができる場にするということです。

公平だと思える場作りのためには、社会調査の実施と、それに基づく参加者の選択をしています。参加している人が偏っていないと思わないように、思ったとしても、こういう根拠があって参加者を選んでいるのですということが示せるように、ということ。

それから、少人数のグループワークを中心として、市民と専門家が対等に話ができるように工夫するということ。

あとは、記録をそのまま公開し、不都合な発言は出さないのではないかと感じられないように工夫するということ。

この辺をお伝えして参加者を募っていますし、参加者にもそういうことをお伝えしているということになります。

冷静な話し合いを導く、その場を客観的に捉えるということに関しては、「コミュニケーション・マニュアル」を整備し、話し合いのときのルールを皆で共有して、そのルールに則って話すということをまずは徹底する。

参加者にファシリテーターをなるべく経験してもらうことによって、その場を客観的に見てもらう。ファシリテーターは、その場の意見を回すということがひとつの責務になりますので、自分の意見は置いておいて、この人の意見はこうだ、この人の意見はこうだということを知る機会とする。

ただ、急にファシリテーターをやってくれといっても難しいので、それを支援するためにサブファシリテーターを設置する。ただし、サブファシリテーターが誘導にならないように、いろいろなルールを内部的にも課す。

というようなことをやって、かなりしっかりルールを決めたコミュニケーションの場を作ったということです。

(スライド 12) その上でフォーラムを設計していきました。その段取りがこのスライドに示されています。我々の目的設定。フォーラム参加者の目的設定。参加者の募集、決定。フォーラムの内容、段取りの決定。というような段階で、フォーラムを設計していきました。

我々の目的については、これまでに話してきましたので割愛します。

フォーラム参加者の目的は、どうしたら市民と専門家がお互いに尊重し、原子カムラの境界を越えることができるかを見出すということで、我々研究陣の目的と一致させて、この課題について一緒に考えていきたいと思いますということで参加してもらっています。

テーマ研究、専門家ネットワークについては、今回は検討していません。というのは、情報提供の場ではないので、いわゆる講義は今回はしていません。実は、原子カムラについての情報提供を 1 件だけ竹中君にやってもらっているのですけれども、それだけで、あとは参加者同士の話し合いが全てという形で進んでおります。

参加者の募集、決定に関しては、社会調査の実施と同時に参加者を募集し、市民参加者、専門家参加者それぞれ 10 名ずつを決定しているということです。市民参加者は、性別、年齢、原子力利用に関する項目、専門家参加者は、年齢、専門領域に関する項目で、なるべくばらけるように、社会調査の分布になるべく合うように配慮しながら決めたとということになります。これは難しいところですね。いくつかの項目で合わせて決めているだけなので。まあ、土田先生からこの後報告があると思いますが、結果として、偏らないメンバーを集めることができたということです。

フォーラムの内容に関しては、全 5 回、隔週土曜日の 13 時から 16 時半が原則になっております。

(スライド 13) テーマは、スライド 13 のようになっております。

スライド 11、12、13 の辺りは、土田先生、竹中君、そして鬼沢さんの話の中で、さらに詳しいところが出てくるものと思います。

ということで、こんな形でまずは私が導入をしたということですが、ここまで何かあれば、お受けしたいと思いますが、いかがでしょうか？

—— 「思い込み」という表現があるのですが、その内容をもっと明確にしないといけないと思います。それはたぶん私たちの仕事だと思うのですが、あの意識調査でそれをするのは難しいと思います。

(土田) まあ、でも、フォーラムで話し合っ、そういう思い込みだったのかとお互いに気づくこともありますので、社会調査だけが全てというわけではないと思います。

—— 思い込みがあるということを前提にするのか。その思い込みを明確にするところから始めるのか。どちらにするのですか？

(木村_浩) それはフォーラムの中で、という意味ですか？ それとも、研究として、という意味ですか？

—— 研究として。

(木村_浩) 研究としては、どういう思い込みがあるかというのは、おそらくフォーラムを通じて、そしてインタビューを通じて、明確に出てきているところなので、これを踏まえて、繰り返すというのは次年度はできるかなと思います。

前回の調査に関しては、「原子カムラで働いている人のことをどう思いますか」という項目にそれが少し表れているかなという感じで、そこでのギャップを見ることで、ある程度代替しようかな、という感じですね。

—— ちょっと包括的なコメントをしたいと思います。

専門家の認識と一般の人の認識をフォローし続けるという社会調査の意義は、将来とも変わらないと思います。

ただ、フォーラムという建てつけを作ったときに、おそらく祝福される着地点は、専門家という人が社会的なクリアリングハウスとして機能して、そこに行けばまともな判断ができるんだという形になって、市民とのインターフェースができてくれば、これはこれで着地点になるのだろうなとは思っています。

ただ、今のままで行くと、「話せば分かる」以上のものが何か出てくるのだろうかという疑問が、正直に言ってぬぐえません。もちろん、「話せば分かる」ということ自体は重要で

す。問答無用ではなくて、話せば分かる。そこにはリテラシーも信用もある。これは社会的に共有していかなければならない話で、議論教育などと親和性がある話なので、そういうことはどんどんやるべきだと思います。

問題は、例えばムラの構成員は何かというところで、経済産業省の原子力の技官の人はムラの人ですか、という質問には答えないままで、その人の認識の中でいっているという点です。私が言いたいのは、実は原子力の問題は政策選択の問題としても社会で取り上げられていて、信用、信頼のレベルではなく、よい社会を選択するための基礎情報のプールとして、どう機能したらいいか、という問題意識があるのですよね。少なくとも、政策決定者はそう考えている。

で、悪いことに、政策決定者には党派性対立がありますから、情報提供の中に広報という色彩が入ってきます。広報というのは、敵対するところよりも、こちらのほうがいいよという情報を出して、賛成者を増やそうとするオペレーションですよ。ここで、構造がより分からなくなってくるのは、この「原子カムラ」の人が、政策決定のダイナミズムに等距離に置かれるクリアリングハウスとして機能し続けるならば、これはこれで祝福された着地点だろうと思うのですが、実際はそうではないかもしれない。

(木村^浩) そういう機能を持ったとしても、今は信頼されないので、では、その時点でどうするか、という議論をしています。

—— なので、ここから先なのですけれども、語らなければいけない問題をある程度あぶりだしていく。信用・信頼の問題ではなく、例えば、実際の政策選択で、政策決定者はどういうことを、政策的な合理性として考えてきたのかという歴史的な情報。例えば核オプションの話もそうですし、エネルギー安全保障、米国との関係、それから原発を輸出プラントとして考えるという部分もある。もちろんコスト、国富をこれだけ化石燃料につぎ込んでいいのかということ。この類の、政策決定者の関心事というのがいくつかあって、こういう背景の中で原子力政策が国策として考えられていて、民間事業者がオペレーションしてきたというこの構図を、どこかでフォーラムの中で共有しないと、「話せば分かる」の次の段階にステップアップできないのではないかという懸念を持ちました。

(木村^浩) それは、この枠組みの中では無理な話です。それをやり始めると、情報提供型になってくるので。だから、それは違うプロジェクトでやらなければいけない。たぶん、この中でやると、それこそ破綻してしまいます。

でも、シンポジウムで、そういう質問やコメントもあったのですよ。そういう話を、どうやってこの延長で展開していくのか、できるのか、という部分は、今後も議論していかなければいけないので、そこはやりますけれども。でも、来年度に向けてそれがすぐできるかといったら、たぶん難しいのではないかと。考えますけど、難しいと思います。

—— 来年度のフォーラムのテーマの問いかけをどう設計するかで、具体化される問題だろうと思います。まあ、時間はあるので。

(木村 浩) この後お話があると思いますけれども、今回のフォーラムのテーマ設定は、我々がやっていないのですね。参加者の関心事に合わせて設計しているというところもあって。でも、十分には拾いきれていないという現実もあるのですけど。その辺は、竹中君の話の中で少し紹介があると思います。

そういう中で、政策決定というところから見るとそういう課題点はあるながらも、実際に話している人たちはそういうところまでは到達はしていないという現実も、ここには表れているのかもしれないですね。

—— 最初の段階はそれでいいと思うのです。だとすると、このアプローチを続けて、例えばフォーラム参加者が今の時点で知りたいと思っていること、疑問に思っていることをインプット情報として集めて、この段階ではこういうことが疑問点として出てきたんだな、というのを何らかの形でつかんでおくと、話し合う方向性の素材にできるのではないか、という気がします。今年、まさしくそのレベルから議論を始めたのであれば、そこを来年度の最初の段階で、キックオフのポイントとするのはいいのではないかなと。

(木村 浩) ただ、原子力の話をするということ、参加してこない人たちも多いということも、どうも見えてきたので、どう設計するかは難しいなと思っています。その辺も踏まえて、次回は議論を展開したいなと思っています。

—— 政策決定のあり方などをこの研究の中に含めるのか含めないのかというのは大きな違いです。政策決定のあり方の議論はしないということによろしいのですよね？

—— 政策決定のメカニズムにもコミュニケーションの問題が存在するというのは今のご指摘の通りだと思いますけれども、今回のこのフォーラムの取り組んでいるコミュニケーションは、それとは対極にあると私は思っています。専門家の選定もまったくそういうことは考えていませんし、市民の選定も、政策決定に関与しない人たちをあえて選んでいるわけです。だから、そこで政策決定、意思決定の話をして、意味がないような気がしますね。

かといって、この取り組みが政策決定にまったく役に立たないとは思ってなくて。政策決定のときのコミュニケーションはどうしたらいいかというのは、今国が抱えている非常に大きな問題のひとつです。市民の意識というのは世論形成の根本になっているわけですから、そこへの取り組みとしてこのフォーラムを位置付けていて、ですから、直結しな

いという問題はあるけど、それをどのように接続していったらいいかというのは、今後の検討課題だとは思いますが。

ただ、フォーラムの中では、政策決定の話は難しいかなという気がします。

—— 分かります。私も、設計の段階で入れておいたほうが、将来の視野が広がるだろうと申し上げているだけで、フォーラムでやれとは言っていません。

私は、実は中学生、高校生対象の議論教育をしているのですよ。意思決定のために、議論して問題意識を共有しようというのを、教育の現場でやっています。問答無用の文化ではなくて、話し合いの文化で物事を考えて決めていこうと。ここまでしかやらないのですよ。

その機能が必要で、今、日本の社会にこれが、原子力の話で欠けている。ただ、次のステップとして、いきなり有権者になれといっても、おとととってなるので、シチズンリテラシーってなんだろうかと、というのを次のレベルとして考えつつやるのですね。シチズンリテラシーというのは、特定のポリシーを選択するための教育ではありません。その前の段階として、政策決定はどのように行われるのか。政策決定者はときどき都合のいいことしか言わないから、そういう嘘をどのように見破って、それにも関わらず、いい方向に社会が動くための選択のために、個々人はどう振舞うべきか。そういう次の階層を、このフォーラムの、次世代かもしれないけど、視野に置いておいていただいたほうがいいのではないかということです。

(木村 浩) これとは違うプロジェクトで、今、そういうものを作りつつあるので、それはまた別のプロジェクトでやろうと思っています。逆に、そこを一緒にしてしまうと一緒のプロジェクトになってしまうので、切り分けないといけないというのもありまして。

—— まあ、密接に関係するでしょうけれども。

(木村 浩) はい。分かりました。ありがとうございます。

他はいかがでしょうか？

②社会調査の実施とフォーラム参加者の決定

(木村 浩) では、もっと具体的な話を話してから、さらにまた議論を進めたいと思います。

次は、公平性を確保するための社会調査で、どのような結果が出ているのかということをお話を土田先生に話してもらいましたので、そちらについて、少しお話をいただければと思います。

(土田) はい。「社会調査の実施とフォーラム参加者の決定」という資料になります。ここにご参加の皆さんにとっては、2回目、3回目になる話がかかなりありますので、省略しながら進めたいと思います。

(スライド2) ご案内の通り、日本原子力学会では首都圏住民と原子力学会員対象の社会調査を毎年1回ずつ行なっています。原子力学会員対象の場合は2007年から、首都圏住民対象の場合は2008年からということです。

手の内を明かしますけれども、原子力学会の発表のときに、市民と専門家という形で用語を使っていたのですが、それに対して「おかしいじゃないか」という質問がありました。首都圏住民が市民かと。それから、原子力学会員が専門家かと。濃度が濃いというだけの話であって、必ずしも一致しないので、一昨日のシンポジウムでは、はっきりと、原子力学会員と首都圏住民という形で申し上げます。

(スライド3) 調査方法も、これまでご案内の通りですので、省略します。

(スライド6) 結果なのですが、前にお話ししていることをもう1回振り返ります。「原子力発電の安全を確保することは可能かどうか」。首都圏住民で可能だという人は4人に1人もいません。むしろ、確保できないという人が3分の1を超えます。

それに対して、原子力学会員は、例外的な人も10%強いますけれども、ほとんど全員が安全を確保できると思っています。市民の視点から言えば、信じ込んでいるという状態になっています。

(スライド7) 「原子力発電を利用すべきか、廃止すべきか」。原子力学会員は、原子力を利用すべきだと思うことが原子力学会員の条件であると言ってもいいくらい、ほぼ全員が利用すべきだと思っています。

首都圏住民の場合は、やはり3.11の前と後でがらっと変わっています。震災の前は、それなりに利用に対する理解はあったのですけれども、震災の後には、利用すべきでないという人が半分ぐらいを占めるという状況に変わっています。

(スライド8) 「原子力発電は安心か不安か」。一番のコアの問題ではないかと思うのですが、なんだかんだと理屈をこねたところで、首都圏住民で安心だと思える人は、いまやもうほとんど例外的な、1割弱の人しかいません。ほとんどの人が不安だと思っています。震災の後、不安と思う人は増加していて、2011年度と2012年度を比べてみても、「どちらかといえば」というところが増えてはいるのですけれども、少なくとも時間が経過することによって不安が減少するというような傾向は見えません。

それに対して、原子力学会員で不安だと思っている人は少ない。震災の後、少し増えましたが、時間の経過とともに減っています。

この辺は理屈ではないですので、ギャップの一番ややこしいところかと思います。

(スライド 9) 原子力発電と経済との関連から言っても、原子力学会員で、原子力発電なしに日本経済の発展が可能だと思っている人は、ほんの数%です。大部分の人は、原子力発電なしに経済発展はないと考えています。

それに対して首都圏住民は、3分の1くらいの方は、原子力なんかなくても経済発展できるんだと考えているということになります。

(スライド 11) ただ、注目すべきは、高レベル放射性廃棄物の処分に関しては、むしろ首都圏住民のほうが、積極的に進めるべきだという考えを、震災後急速に増やしています。学会員のほうが、無理なんじゃないのと腰が引けているようなスタンスでして、この点は話し合いによって、ぐんと進む可能性はあるだろうと思っています。

(スライド 13) 次ですが、「思い込み」の一部がここで出ているかと思います。

(スライド 14) 原子力に携わっている人たちの価値観や考え方がずれていると思っている首都圏の人たちは、確かに多いです。3分の1くらいの方は思っています。でも、3分の1なのですね。

ところが、原子力学会員は、80%近くの方が、自分たちは一般の人から、ずれている人間だと見られているんだと思っています。

(スライド 15) それから、首都圏住民は、不安に思ったり、なんだかんだあっても、原子力に携わっている人に感謝しているかと聞けば、半分以上の人が感謝していますと答えています。

けれども、原子力学会員で、自分たちが感謝されていると思っている人は、ほんの数%です。半分以上の方は、自分たちは感謝されていないとはっきり答えている。この辺りの思い込みも、話し合いによって解消できる余地はあるのではないかと思います。

(スライド 16) ここまでが実は前ふりです。新しいところは次からでして、フォーラム参加者を選定するときには、先ほど木村先生から少し前出しがありましたが、このような形でやりました。

まず、首都圏住民です。市民代表という形なのですが、1月の調査のときに、500名の回答者を得られたわけですが、回答票を調査員が回収にいったときに、「フォーラムというものもやっていますから、参加していただけますか」という形で、募集要項を手渡してい

ます。それを読んで、木村先生の研究室宛に応募要項を切手を貼らずに送るという形になっていたのですが、応募してきた人は結局 8 名しかいませんでした。女性が 2 名、男性が 6 名です。

ちょっと前後しますけれども、1 月の調査の結果を見ますと、まず原子力に対する考え方で、明確に反対だと答えた市民が 50.2%、「どちらともいえない」も含めて、それ以外が 49.8%でしたので、原子力利用に反対か、それ以外かという形で 1:1 になるように選びましょうという基準をひとつ設けました。それから、性別もやはり男女半々になったほうがいいという基準を設けました。年齢も、できれば小刻みにしたいのですが、しかし 10 人でするので、若手ということで 20 代、30 代、若手ではないということで 40 代以上と 2 分割することにしました。これで 2 かける 2 かける 2 で 8 カテゴリーができて、10 人でするので、残った 2 人は適当に埋め込むということで、だいたいこの 3 つの基準に従って選びたいと考えました。

しかし、先ほど申し上げましたように、応募者が 8 名しかいませんでしたので、元気ネットの方々をお願いして、元気ネットの知り合いの人に、自分たちが知らない人を紹介してほしいということをお願いしました。そこで賛成反対まで聞くことはできませんので、性別、年齢で足りないところ、簡単に言えば女性が足りないというような形で、お願いして、紹介してもらいました。その結果、4 名を紹介していただきまして、女性 5 名、男性 7 名のプールができましたので、この 12 名から、先ほどの基準を使って、参加者 10 名を選定しています。

次に原子力学会員ですが、1 月の調査のときに、1400 名無作為抽出で郵送調査をかけたわけですが、この場合は、調査票にフォーラムの参加募集の資料を同封して送りました。応募者は 25 名いました。女性 2 名、男性 23 名です。

元々原子力学会は女性が極端に少ないので、男女というのは基準にできないと。けれども、正直に申し上げまして、なるべく女性に参加してもらいたいという選定基準があったことは事実かと思えます。それから、賛成反対に関しても、賛成が 82%でするので、これも分類には使えない。では、何を基準にしたかということ、まずは年齢です。首都圏住民同様、20 代、30 代と、40 代以上が半々になるようにしようと。それから、専門分野が 6 つほどに分かれていますので、これは複数回答ですので、お一人の方が複数の分野に答えられるのですが、これを見て、年齢が半々、専門分野が偏らないという基準の下に、女性 2 名、男性 8 名を選定しました。

正直に申し上げて、応募者がこれだけしかないでするので、こちらとしても打つ手は限られていまして、できるだけことはやりました、ということです。

これに関しては、コメントをくださった谷口先生が、自分も東海村で 10 何年に渡って似たようなことをやっているけれども、私たちもそうでしたよとおっしゃっていました。東海村の村民に募集をかけても、10 人も集まりませんでしたと。こんなものでしょう、というコメントがありました。

(木村^浩) 全村民に声をかけて、6名と言っていましたから。

(土田) でも、それでよしとしてはいけなくて、次回はこれをもう少し増やすということを考えなければいけません。

(スライド 17) それで、選ばれた 10 人がどんな人たちだったかということ、一応調査していますので、確認をしました。

(スライド 18) まず、首都圏住民の社会調査結果と、首都圏住民から選ばれたフォーラム参加者の意見の比較です。

原子力に関心があるかどうか。これは、フォーラム参加者のほうが関心がある人が多いという形で、若干関心ありのほうに、フォーラム参加者が偏っています。

原子力発電を利用すべきか、やめるべきか。ほぼ同じ分布なのですが、「どちらかといえばやめるべき」という人よりも、はっきりと「やめるべき」という人のほうが多いということで、後でも出てくるのですが、「どちらともいえない」というような中立的な意見を述べる人は少ない。

首都圏住民の参加者に関しては、この 2 つの傾向があります。

(スライド 19) 続いて、安心ですか、不安ですか。この辺りは、元々フォーラム参加者が 10 名しかいませんので、誤差がかなり入り込みますので、まあ同じ分布と見ていいだろうと思います。

経済的に発展できるかどうかということに関しても、ご覧の通り、「どちらともいえない」が少なく、それぞれ、できるできないのほうに寄っています。

ということで、はっきり自分の意見を述べているということと、関心が少し高い方たちが集まってきました。しかし、それを除けばだいたい縮図で、特に反対している人たちだけが集まったとか、特に賛成している人たちだけが集まったというような偏りはなかったといえるかと思えます。

(スライド 20) 次に、原子力学会員です。元々原子力学会員というのは偏った人たちです。ので、関心があるかどうかというのは、ほとんど同じです。

利用していくべきか、やめるべきかについても、同じです。

(スライド 21) 安心かどうかということに関しても、10 人というプールを考えれば、同じと考えていいでしょう。

それから、経済的に発展できるかどうか、同じです。

ということで、結果的に、首都圏住民全体とそれほど違わない人たちに集まってもらえ
たし、原子力学会員の中でもそれほど極端な人たちではない人たちに集まってもらえた、
ということができたと思います。以上です。

(木村^浩) ありがとうございます。では、土田先生の担当の部分について、ご質問をどう
ぞ。

—— 足りない方は、元気ネットの方のお知り合いに頼んで、そのお知り合いのお知り合
いを紹介していただいた、孫みたいな感じのお知り合いということですか？

(土田) そうですね。

—— 直接知らない方です。

—— 中間に入っている方はご存知の方なのですよ。その中間に入った方を選択された
基準は何かあるのですか？

—— 20代の女性を知っていそうな人です。

(木村^浩) 応募してきた方は若い方が少なかったもので、若い女性の方をちゃんと紹介して
くれそうな人をお願いしたという形です。

(土田) まあ、緊急避難的に、と言っていいのではないかと思います。

—— でも、そのときに、その方たちにもアンケートを取ったのです。

(土田) 最終的には取っています。

—— 適当にチョイスしたと思われるといけないので、その点はしっかり補足しておきま
す。きちっとアンケートもやってもらい、その結果、選ばれない可能性もあります、と
いうことまでお伝えして、紹介してもらっているということなのです。

—— かなりの人数でしたよね。その中からやっと最終的に4人決まったと。

(木村^浩) 声はいっぱいかけてもらっているのですよ。たぶん、30人くらいはかけてもら
っていますよね。

—— 選ばれた方は、本当に全表面識のない方になったのですか？

—— そうです。私たちは最初からサブファシリテーターに入るという前提でしたので、直接面識がない人にする、という大前提がありました。

—— 首都圏住民の参加者の男女比は、最終的には何名ずつだったのですか？

(土田) 男性 5 名、女性 5 名です。

—— 原子力に携わっている人に感謝しているかどうか、という質問がありますよね。原子力の関係者の中には、強烈なメディア、反対派の人たちの矢面に立たされている方がいて、一般の人たちに対してそういうイメージを形成してしまっているのですよね。ですから、そういう人たちと、首都圏住民のいわゆる普通の人とは、まったく違うわけですね。これは極めて興味深い結果だと思います。

—— 確かにその通りですね。専門家は、厳しい質問をする相手としかコンタクトをしたことがなくて、一般の人と会話をする機会というのは、きわめて少ないのです。

これは、政策決定者にも当てはまると思います。政策決定者が普段相手をしているのは、記者や、反対派の人ばかりだから。あるいは訴訟の場面。だから、政策決定者は、講演をするときに、相手がそういう意識を持っていると思い込んで資料を作っている。私は、3年前のあるシンポジウムの席上で、それを初めて知りました。そのときに、新潟の市民活動をやっておられる新野さんがおっしゃったことが強く印象に残っています。あの方はもう何十年もそういう活動をやっておられながら、そのときに政策決定者が説明した話を聞いて、「私たちのレベルでお話をされたのを聞きするのは、今日が初めてです」とおっしゃっていました。いつもアンチの人に語りかけるような話しかしてくれなかったと。今日初めて、そうではないお話をお聞きしましたとおっしゃっていました。

その話が印象的で、なぜかなと思っていたのですが、今のご指摘を聞いて、これは学会員だけではなく、政策決定者にもそういうギャップが存在しているのではないかという気がして。これは非常に面白い気づきではないかという気がします。

—— 実体験に基づいてそう回答したのか、印象で回答したのかによって、全然違いますよね。原子力関係者だって、500 人もいれば、全員が全員そういう実体験を持っているとは考えにくいのですが。

—— 代理経験をしているから。

(土田) あとは、やはりマスコミが反対の人たちを中心的に取り上げますから、どうしても市民の声はそうだと思ってしまうのです。

—— それは思い込みですよ。実体験の方は少ないのではないかと思いますのですけど。

—— 確かにそうかもしれませんね。

—— 私の会社の中でも、矢面に立っている人はそんなにいないのだけど、そういった人の持っている価値意識は伝播するのですよ。それが9割くらいに浸透する。

—— 身内に感謝するのはみっともないということで、謙遜しておられるのかなと思ったのですけど。

—— まあ、それもあるのかもしれないけど。どちらかですね。

—— 本人は感謝してもらいたいという気持ちが強いでしょうから、なおさらこういう結果になるのかもしれない。

—— 今年度の調査が重要だということに、このグラフの並びを見て、今更ながら気づきました。そうすると、トレンドがはっきり見える。

特に不安のところなどは、それではっきりトレンドが見えてくるだろうなという期待があります。記憶が風化している一方で、汚染水の問題もあり、どちらの方向で動くのかを見るために、とても重要な質問だと思います。

それから、意外だなと思ったのが、処分地を早急に決定すべきという動きが出てきたことです。これについては、もう少し深く考えたいと思います。おそらく、賛成、反対の両方の根拠で出てきたのかなという気がします。決着させるためには最終処分をしなければいけないし、安定的に持続的にやるためにも最終処分をしなければいけない。この両方が出てきているのかなという仮説ですが、これはまた追って、来年以降の調査結果を眺めながら考えたいと思います。

(土田) おそらく、福島の問題が出てきて、身近な問題になって、絵空事でなくなったということで、現実的な判断が増えてきたのではないかと思いますけれども。

—— それから、脱原子力をしてもしもこれは避けて通れない問題だということ、連日のように新聞が報道していましたから。今までは、原子力が嫌いだから処分場も嫌いと考えて

いた。こういう人たちの意識が変化したという可能性もありますね。

—— 今の話と関連するのですけれども、この高レベル放射性廃棄物の最終処分場を早急に決定すべきという質問自体は、首都圏住民の方に、今までも取ってきているのですね。

(土田) はい。ずっと取っています。

—— でも、高レベル放射性廃棄物という言葉を理解して、これに答えていたのでしょうか。

それから、もうひとつは、2011年度から早く決定すべきだという意見が増えていますが、それは今おっしゃった通り、福島原発の事故があって、皆さんの認識が深まったのも確かだと思いますけれども、「放射性廃棄物全部について、早く処分したほうがいいよね」という気持ちが入っているのではないかと思うのです。高レベルとは限らず、とにかく、放射線に汚染された廃棄物を全部処分したほうがいいよねという意味で、ここがどんどん増えているのかなと思ったのですけれども。

(土田) おっしゃる通りだと思います。

高レベル放射性廃棄物に関するアンケートというのは、震災前から結構やられていたのです。ところが、言っても分かってもらえない、どうやって質問したらいいか、ということがいつも話題になっていました。

さらに言えば、仕方がないから、事実をそのまま正確に書いて、アンケートを作ります。放射性でしょう。廃棄物でしょう。高レベルでしょう。嫌われる単語が3つ並んでいて、受け入れるなんて絶対に答えられるはずはない、というのが震災前までは定番だったのですが。

(木村 浩) この調査の系列でも、高レベル放射性廃棄物については、震災前の調査で、何年かやっているのですね。たぶん、2009年度、2010年度だったと思います(編集注:2008年度~2010年度)。1ページを全部高レベル放射性廃棄物に割いて、分析した結果があります。興味があれば、後ほど公開しているホームページのURLをお伝えします。

その頃、私も高レベル放射性廃棄物に関してインタビューをしていたので、そこで分かってきたいろいろな意見を挙げて、あなたはどうか、と聞くような問題を作って、それなりに面白い結果が出ているので、興味があったらぜひご覧ください。

—— 学会のいろいろな場で、事故の後、何度も議論がされていて、今まさにご意見があったように、福島除染土壌の始末で大変苦勞していて、あれが早く進まないとうしようもないということが、必ずや処分場の促進につながるのではないかと専門家として

の期待感があったのですよ。こういう数字を見ると、まさにその期待感が数字として表れているなど、私は強く感じましたね。

—— そのときに、NIMBYの話があるのですよ。福島では実際に、自分のところは嫌だけど、処分場はいるんだという意見がほとんどで、そこをアンケートの形で織り込んで、これから調べていくことは、非常に重要だと思います。

—— 自分の町でもいいか、という質問ですね。

—— そうです。やらなければいけないという意見が最近増えているのは分かるのですが、では自分のところでもいいか、ということ聞いてみる。

(土田) 恥ずかしながら、京都でも、岩手の松を五山で燃やそうといったら、大反対されましたからね。

(木村^浩) でも、NIMBYがなぜ起こるのかというのは、それなりに構造的に分析されてきているので、その辺を踏まえないと意味がなくて。総論賛成、各論反対というのはおかしいことではなくて、普通のことなのですよね。それは心理学的に分析すれば、矛盾なく起こる。それを越えてどうするかという議論をしなければいけない。

—— だからといって、そこで切れちゃうと、もうそれ以上どうしようもなくて。どうしてそういうことになったのかということも、先ほどの政策決定の話もあるだろうし、心理学的な話もあるだろうし、いろいろなことがあるのでしょけれども、それを打開する何かが見えてくるようなことを、アンケートなりなんなりの中で示唆できるように、まず調べてみることから始めることが大切なのではないでしょうか。

—— ごもつともなのですが、この調査は首都圏住民と限られていますので、その質問はたぶん、ここでは適用できません。対象を広げないと、今おっしゃったことはできませんので。

—— でも、「それは首都圏住民の意見じゃないか」と言われたときに、「日本全体でも同様です」みたいなことが言えるような手だてがあるといいのですが。こと、この問題に関しては。

(土田) 予算がつけば。

—— 調査対象を広げないで、新たな設問に付け加えるというのはありませんね。

—— いや、この建てつけだからこそ、オールジャパンで調べるべきであって。

—— 石原さんが、都知事時代に、東京に原子力発電所を建てようと言い出したのは、まさにそういうことですよ。別に自分だけを遠くに置いているのではないということ、知事は言いたかったのです。

—— 今年も同じ質問をされるのですか？ 例えば、高レベル放射性廃棄物に関して。

(土田) これから考えます。でも、なるべく同じ質問を残したいと思います。

—— というのは、福島事故があつて、そのときに原子力関係の用語が全部出てきたから増えたのかもしれないという感じがあつて。そのうち忘れられて、減ってくるのかな、という気がしたので。

—— 少なくとも、事故の1年後、2年後でやっていますが、関心が減っていることはないです。むしろ、高まっています。

(木村_浩) もう少し経年変化を見ていかないと、この辺は分かりません。

—— 高レベル放射性廃棄物の処分場の質問のグラフを見ると、2012年度だけで比較すると、学会員も首都圏住民もほとんど同じ意見ですよ。

(木村_浩) そうなのです。ギャップが近づいているのです。

他はよろしいでしょうか。2時半ということで、一旦ここで休憩を入れて、次の発表に入りたいと思います。では、14時40分に再開したいと思いますので、よろしくお願いします。

③フォーラム実施状況の紹介

(木村_浩) そうしたら、再開したいと思います。次は、フォーラム実施状況の紹介ということで、竹中君からです。

(竹中) 「フォーラム実施状況の紹介」では、基本的にフォーラム研究会でどういうことを我々が考えていたのかということをお話しました。なので、前回の業務推進全体会で

話したところは省略しつつ、話していこうと思います。

(スライド2) スライド2に書いてあるのが、全5回のフォーラムの中で扱ったテーマとなっています。第1回が、「原子カムラ」について。第2回が、原子カムラのイメージについて。第3回が、原子力への関心。第4回は、安全性、必要性、エネルギーの中での位置づけ。第5回に、もう1回原子カムラの話に戻るということになっています。

(スライド3) スライド3では、実はフォーラム前に設定していたテーマとは結構変わっているということを示しています。変わっていく過程を、フォーラム研究会の中でどのように作っていったのかということをお話ししていきました。

(スライド5) スライド5については、先ほど木村先生が話していただいたので、簡単に触れます。

ひとつが、対等に話せる雰囲気ということで、なるべく情報提供型のコミュニケーションにならないように、お互いの意見が言えるような場作りをしっかりとしていこうということです。

情報のある程度入れた上でのコミュニケーションをやってみたい、という意見もあるのですが、いきなりそれをするのは難しいのではないかと、ということをフォーラム研究会の中で話していったということを言っております。

(スライド7) スライド7、8では、お互いを尊重するコミュニケーションをしていくために、どういうことを参加者にやらしてもらったか、また、注意してもらったかということをもとめています。

今回、「コミュニケーション・マニュアル」というものを整備し、注意していただきたいところをポイントとしてまとめ、参加者にあらかじめ配布しました。相手の意見をしっかりと聞いて、自分の意見をしっかりと話す、ということを行なっていただきました。

その「相手の意見をしっかりと聞く」ということをよく経験できるものとして、ファシリテーションも経験していただいたという形になります。

(スライド9) スライド9からは、どのようにフォーラムが進んでいったかということをお話しています。

ここに、一例として第3回のプログラムを挙げていますが、このプログラムの肝となっているのは、グループワーク1とグループワーク2という部分になっています。

1回目のグループワークは、ブレインストーミングをやっていただいて、テーマについてしっかりと話し合っていたかということを行なっています。

2回目のグループワークは、1回目のグループワークで出てきた意見を各グループで発表

していただいたわけですが、その発表に対して質問を出していただいて、その質問に対する回答を作るという段階です。質問への回答作りを、もう 1 回グループワークでやっていたと、という形です。

(スライド 10) スライド 10 のような配置で、グループワークを行なっています。1 グループ、6 人、7 人ぐらいで、専門家と市民の方が同数になるようにしています。そこにファシリテーターに当たった方がいらっしゃって、それを支援する方として、今回ご協力をいただいた元気ネットの皆さんに、各グループに 2 名ずつ、サブファシリテーターという立場で入っていただいています。

このグループ分けや、ファシリテーターは誰かということは、全てくじ引きによって決めているという形になっております。

(スライド 12) 次に、グループワークの進め方です。ブレインストーミングで、1 人 1 人にしっかり意見を出してもらう。出た意見に対してもう 1 回議論をする。どういう意見が出てきたのかということグルーピングしてもらう。ということで、1 つの意見にまとめるというよりも、テーマについて、いろいろな意見があるんだよということを、こういう感じで可視化しています。

また、専門家は青い付箋に自分の意見を書く、市民はピンク色の付箋に自分の意見を書くということで、どちらの立場の人が書いたのかということを明示しております。専門家の人にもこういう意見の人もいれば、こういう意見の人もあるんだなということがしっかり可視化できるような形にしていくということを意識して、色を分けました。

(スライド 13、14) スライド 13、14 は、実際にどういう感じで模造紙がまとまったのかという図になっております。スライド 14 の写真は第 5 回のものになるのですが、第 5 回になると、まとめ方もうまくなっています。

(スライド 15) こうしてできた模造紙を基に、各グループが発表を行なっているのですが、その発表に対して、いきなり質疑応答を始めるのではなくて、1 回質問を出してもらった上で、答えを作ることもグループワークでやってもらいました。

これをすることによって、グループワーク 1 (意見出し) で出てきた意見をさらに深めることができるのではないか。あるいは、質問に対しての答えも、1 人 1 人全然違うということが分かっていたかというので、今回は質疑応答もグループワークでやっていたということになります。

(スライド 17) スライド 17 からは、フォーラムの中でどういう問題が起きたかという話で、ここは少しじっくり話していきたいと思います。

フォーラム全体に関する問題点ということで、フォーラム自体が原子力肯定のためにやられているのではないか、という意見が参加者から聞かれました。その原因をいろいろ考えていったわけですが、ひとつは、専門家と面と向かっては反対意見を言いづらい雰囲気があるかもしれない。あるいは、我々運営陣がそういう雰囲気を作っているのではないか。フォーラムの進め方について、公平だということをしっかり見えるような形にしていかなければならない、ということです。

2つ目が、進め方とはまた別に、テーマ設定自体が原子力推進への誘導のように見える可能性があるのではないかとということです。第2回のテーマは、「なぜ、原子力ムラはなんとなく良いイメージを持たれないのか？ そのイメージを払拭するには、どうしたら良いだろうか？」なのですが、ここで、「悪いイメージを払拭する」というところまでテーマに書いてしまってよかったのか、ということです。今回、「原子力ムラの境界を越える」ということを目的にフォーラムを行なっていたので、参加者にそれを一緒に考えてくださいということ自体は何の問題もなかったと思っております。ただ、境界を越えるために何が必要かということについては、参加者が話して決めることであって、テーマにこう書いてしまっただけではまずかったのではないかと、第2回のテーマの反省となっております。

ということを踏まえて、フォーラムの進め方とテーマ設定に対して、どのように修正していったかということをお話してまいりました。

(スライド 18) まず、フォーラムの進め方についてですが、なるべく参加者だけでグループワークを進めていけるようにすることが大事だということで、まずは目的をはっきりする。このフォーラムの目的は何なのかということ、しっかり参加者にも共有していただくということを行なったということです。

また、グループワークの進め方について我々が口を出すことによって、誘導されているのではないか、恣意的に結論を導き出そうとしているのではないか、というような疑いを持たれてしまうかもしれない。なので、参加者だけでグループワークを進められるように、進め方を確認できる資料（青い紙）を配布しました。

また、あらかじめコミュニケーション・マニュアルを配っていたわけですが、非常に難しいということで、特にポイントとして守ってほしいところをまとめたもの。あるいは、サブファシリテーターの役割をしっかりと明示した資料（赤い紙）を、参加者に配るというような対応を行ないました。

(スライド 19) スライド 19 の写真は、その 2 つの資料の写真です。

(スライド 20) 次は、テーマ設定に気がついたという話です。

第1回と第5回は、あらかじめテーマ設定をしておりました。ただし、その間の第2回

から第4回は、参加者が話したいと思っているテーマを選んでいきたい。特に第3回、第4回は、参加者の投票によってテーマを選びました。

このテーマ設定の際に、なるべく気をつけようとしていたことは、参加者がフォーラムは公平だと思えるようにする、ということです。運営側が参加者に求めていることは、参加者同士が尊重するというだけであって、運営側が「こういう意見が良い、こういう意見は悪い」というような価値観を持っている、と参加者が感じてしまうようなテーマにはなるべくならないようにしました。

(スライド21) スライド21は、第3回で取り扱いたいテーマということですが、参加者に投票していただいて、一番票が多い、関心、アレルギーというようなところをメインテーマにしました。

(スライド23) 第4回では、第3回で扱った以外のテーマもしっかり扱うということで、参加者が興味を持っているところを話していこうということをしかり行なっております。

ただ、第4回フォーラムで扱ったテーマは、安全・危険であるとか、原子力の必要性、エネルギー全体との関係ということで、非常に意見のぶつかりが多そうなテーマであると。一方で、こういうテーマは、第1回のフォーラムから、参加者が話したいとずっと言っていたテーマであるということで、どこかで扱いたいと思っていたテーマでもあります。

では、こういう意見のぶつかりがあるテーマを扱えるのはどういうときか。やはり冷静に話し合うとか、客観的に話し合いを捉えるという下地があって、初めて取り扱えるテーマではないかということで、運営側から見て、それがある程度できているのではないかと考えたタイミングということで、第4回に行なっています。

(スライド25) 第4回フォーラムは、今までと少し違った枠組みで行ないました。

第1回から第3回を終え、参加者がフォーラムに慣れてきた。それは、フォーラムのやり方であるとか、ルールへの慣れもありますし、一番大きかったのは、人となりを知ることができてきたということだと思います。その結果、冷静に話し合う、あるいは、客観的に話し合いを捉えるということが、行なわれているように見えた。ということで、意見がぶつかるようなテーマに対して、自分の意見や言いたいことをはっきりと言えらる枠組みを作る、ということを行ないました。

(スライド26) 第4回はそれまでとは違う枠組みということなのですが、実は、第3回から第4回の間、宿題という形で、自分の意見をまとめてくださいということをお願いしました。安全性、必要性、エネルギー全体の中での位置づけというテーマの中から、いずれかのテーマを選んで、自分の意見を1ページにまとめてくださいと。そのまとめたものに対して、その論拠となるような資料をいくらかでもいいので添付して下さい、

ということを参加者にお願いしたということになります。

その結果、30 ページぐらい添付資料をつけてくださった方もいらっしゃいました。それを基に、全員に対して自分の意見を表明するような機会を持っていただいたということになります。

(スライド 27) スライド 27 は、第 4 回フォーラムに対する参加者の声になります。

自分の意見をはっきり表明する機会が、ここでようやく持てたということにすごい充実感があった。あるいは、そういうところで議論することで、自分の意見を深められてよかったという意見がありました。

また、他の参加者については、1 人 1 人の率直な考え方、意見を知ることができたという意見があります。第 3 回までで、人となりを知ることはできていたと思うのですが、その人が原子力に対してどのような考えを持っているのか、ということを知ることができたのが、この第 4 回なのかなということです。

その中で、専門家と市民の意見が逆であることが多いということが分かったという意見が聞かれたのですが、これを冷静に受け止めることができている状態というのは、フォーラムの狙いに沿っているのかなと思っています。

(スライド 28) スライド 28 は、これから分析を深めていくところではあるのですが、このフォーラムの狙いに対して、参加者がどういうことを感じたのかということがまとめられています。こちらは、インタビューから引用しているものになります。

フォーラム参加前は、市民は専門家に「難しいことを言うんだろうな」「お高くとまっているんだろうな」というイメージを持っていて、専門家は市民に「感情的に批判してくるんだろうな」「聞く耳を持たないんだろうな」というイメージを持っていたということです。こういうお互いの思い込みによるイメージで、お互いに距離を取ってしまっている状態が、境界のある状態なのではないか、とおっしゃる参加者の方もいらっしゃいました。

フォーラム参加後は、市民は「専門家もただの人なんだ」「専門家の中にもいろんな考え方があるんだな」ということに気づいて、専門家は「市民から必ずしも責められるというわけではないんだ」「市民にはちゃんと話をすれば通じるんだ」ということに気づいたということです。同じ意見になることは必ずしも必要ではなくて、自分とは異なる意見であるが、なぜそう考えるのかをお互いに理解することが大切なのではないか。境界というものは、お互いの思い込みでできていて、直接会って話し、お互いの人となりを理解すれば、境界は越えられるかもしれない。そういう声が聞かれたということになります。

(スライド 29) スライド 29 と 30 は、シンポジウムをやるということで、その中でぜひ話してほしいコメントがあれば、アンケートに書いてくださいということで、参加者に書いていただいたものとなります。ここは割愛します。

最後に、私事になるのですが、全員で作ってきた研究に対して、シンポジウムで発表させていただいたことに、感謝しております。ありがとうございました。

(木村 浩) そうしたら、鬼沢さんからも連続で話していただいたほうがいいかなと思います。

(鬼沢) 元気ネットがサブファシリテーターを今回務めさせていただいたのと、5回のフォーラムを開くまでの準備段階にずっと関わらせていただいたので、その報告をと思いました。竹中さんのほうでほとんどの話をしてくださっているのです、私たちがサブファシリテーターをしてどうだったかというところに集中して、お話をしようと思いました。

(スライド 2~5) その前に、まず、元気ネットがどういう NPO なのかということを中心に説明しました。家庭から出るごみからスタートした NPO だったものですから、高レベル放射性廃棄物の問題に関心を持ったのはどういうきっかけだったのか、ということを中心に説明しました。

(スライド 6) そして、この 6 年間、高レベル放射性廃棄物の地域ワークショップを全国で開いてきたという経験と、木村先生から今回のお話をいただいて、とてもいい経験ができる、スキルアップにつながるということで、このフォーラムに参加をさせていただいたということをお話ししました。

(スライド 8) それから、高レベル放射性廃棄物のワークショップをやりながら、メンバー 4 人で、一歩先を進んでいるスウェーデンとフランスの地層処分のコミュニケーションの仕方について学びに行き、インタビュー形式の本にまとめたという話。

3.11 以降に、ワークショップ形式で、自分たち自らで放射線について学ぶ機会を作るための、「放射線学び合い BOOK」というものを作りましたので、その紹介をさせていただきました。

(スライド 10) その後に、このフォーラムのサブファシリテーターを務めた感想を話しました。

私の中では、フォーラムを開くまでの準備段階がとても勉強になりましたし、いろいろ私たちが考えるきっかけだったと思うので、その準備段階、9 回研究会を進めてきたところの話をさせていただきました。やはりリスクコミュニケーションの部分で、いかにファシリテーションとかコミュニケーションが大切なのかということ、私たち自身も改めて気づかされた研究会だったものですから、その話をしたいと思ったのですが、この辺りであと 1 分というカードが出たものですから、後半は非常に簡単に話を進めてしまったのです。

けれども。

(スライド 11) サブファシリテーターとして、かなり私たちは気をつけたつもりだったのですけれども、参加者の方の初回のアンケートに、「元気ネットの言葉が強すぎる。サブファシリテーターが誘導しているように感じた」というご意見がありました。それがあったから、次回はもっと気をつけてやりましたということをお伝えしました。

やはり気をつけていても、いろいろな人がいると、そういうふうに見えるのだな、ということが分かったので、それをなるべく見えない形に、公平に進めているということを知っていただくためにはどうするかということも大切だなと思ひまして、真摯に受け止めたつもりです。

(スライド 12) それで、5回を終えての感想を、最後の2枚にまとめてあります。

私たちが今まで地域で実施してきたワークショップとの大きな違いは、やはり、いかに参加している方たちに公平であるか、参加者の皆さんが自由に発言できる場作りをしていくかということだと思ひます。

それは今までの地域ワークショップでも気をつけているのですけれども、高レベル放射性廃棄物のワークショップの場合は、より身近に、自分ごととして考えていただくために、誘導ではないのですけれども、いいキーワードとか話の流れが出てきたときは、そこをぐっと深掘りしていくようなことを実はしていたのです。やはり、単に言い合って終わりではなくて、本当にどうなのかという議論がもう少し深まる形を心がけていたのですけれども。

でも、今回はそれをしてはいけないということが分かりまして、参加者のファシリテーターの方の本当のサブとして、タイムキーパーだったり、見える化だったり、淡々とお手伝いしていったというところがあります。

(スライド 13) その中から見えた、来年度に向けての課題としては、話の流れがしっかり見えたり、深まりができたり、話が発展していく形を作るには、どのようにしていくべきかという検討が必要なのかなと感じています。

ここまでがサブファシリテーターをした元気ネットのスタッフの感想です。最後の2枚は、総合ファシリテーターのコメントです。2人合わせて10分だったので、本当に簡単な説明でしたが。

(竹中) 補足になるかもしれませんが、実はシンポジウムの後に、登壇していただいた参加者の方との懇親会があったのですけれども、その中で、「今日、ようやく元気ネットがどういう団体なのか、よく分かりました。あれが最初から分かっていたら、変に身構えるようなことがなかったんじゃないでしょうか」というような話がありました。最初にしつ

かり説明をしておけばよかったかなと思ったところです。

—— 総合ファシリテーターがおっしゃっていたけど、元気ネットの説明を最初にすればよかったという話は、その通りだと思いますね。

(鬼沢) でも、2つのNPOがあるじゃないですか。たぶん、初めて参加した人にはよく分からないですよ。そのときに参加者から、「なぜNPOの人がこんなにたくさんいなければいけないのか」と言われたのですよ(笑)。でも、そこで何か説明をしても、分からないかなというのもあったし。5回参加すれば分かるでしょうと思っていたのですが。

(木村 浩) 最初に、信頼もない状態で、「私は原子力とは関係ありません」と言っても、分かってもらえないでしょうね。

(鬼沢) 言い訳に聞こえますよね。

—— 確かに、5回を経たから理解されたのかもしれませんがね。

—— もし、最初に今鬼沢さんが説明したようなことを説明しても、やはり、原子力推進派なのではないか、と思われてしまったと思うのです。自分たちではそういうつもりはないのだけど。でも、社会からそう言われていますし。学ぶために行ったということは、学んで推進しているのね、と思われる可能性もありますよね。

(木村 浩) 逆に言うと、これを聞いて、「ああ、原子力の団体ではなくて、環境の団体なのか」と聞けたというのは、

—— よかったです。

(鬼沢) だから、最初に元気ネットの紹介が何枚かあったのは、多いかなとは思ったのですが、そもそもどういう団体で、どうして原子力に関心を持ったかという説明をしたほうがいいかなと思ったものですから。

—— 入っていてよかったと思います。

—— 社会調査で、震災後、高レベル放射性廃棄物の地層処分の関心が、首都圏住民のほうも高くなったということと重なると思うのですが、やはり今まで元気ネットがやってきたワークショップでも、廃棄物の問題のワークショップなのだけど、必ず原発のことか

ら入ってくるのですね。で、原発反対の人は、廃棄物の処分の問題も、よく分からないし、怖いから反対、という感じが一般的だったと思うのですけれども、その区別がついてきたというのは、すごいことだなと思います。

(木村 浩) 鬼沢さん、最後の 2 枚のスライドは説明していなかったような気がしますけれども、いいのですか。

(鬼沢) この 2 枚は私が作ったのではなくて、総合ファシリテーターのコメントですから。

—— でも、ここに書いてある通りのことを話していましたよね。

(木村 浩) そうですね。最後の 2 枚は、この通り、ということでした。

ということで、フォーラムの実施状況について、今説明がありましたけれども、いかがでしょうか？

—— まず、参加者の出席率を教えてください。

(竹中) 第 1 回は、専門家がお一方、用事でお休みになりました。

第 1 回に出席された専門家の中で、次からは全部欠席させてくださいということで、1 人辞退された方がいらっしゃいました。ですから、第 2 回以降は市民 10 人と専門家 9 人という形になりました。

あとは、毎回、病気であるとか、家庭の事情とかで、1 人ずつくらい抜けた形ですけれども、半分以上の方が全 5 回に出席していただいて、残りの方も 4 回は出席しています。2 回欠席された方はいなかったという形になります。

—— 出席表みたいなものがあつたら、あとで教えてください。

(木村 浩) 一番人数が少ないときで、16 人でした。

—— ファシリテーターは、市民の中から選ばれたのですか？

—— いえ、両方です。毎回参加者からファシリテーターをくじ引きで選んでいました。

—— ファシリテーターに選ばれた方が四苦八苦していろいろなされた後で、考えが変わったか、どう思われたか、そういうものの記録はありますか？

—— それはデータ分析で出てきますよね。土田先生が今分析されているところです。

—— 今されているところなのですか？

(木村 浩) はい。時間的に言うと、8月30日に全20名のインタビューが終わっています。こういうきっかけがあったからこう気づいた、こう変わった、ということを知っていますので、それをフォーラムの記録と照らして、その場面で何が実際に起こっていたかということと、その人の変化をマッチングしていく、という作業をこれからやるということです。

—— 楽しみですね。

—— 毎回観察していると、漠然とですが、意識の変化が起きているのが見てとれました。だから、それをちゃんと分析した結果がどうなるのかは、大変興味深いです。

(木村 浩) ただ、何かきっかけがポンとあって、パッと変わったという人もいますのだけれども、やはり全体の積み重ねで徐々に変わってきたような気がします、という人が結構多かったです。

—— 先ほどの竹中さんのお話の中で、第4回フォーラムで意見の対立が起きるようなテーマを取り上げたとありましたよね。で、3回のフォーラムを踏まえた上で、やったほうが良いという判断があったと。そのことについて、まだちゃんとした分析はできていないのでしょうか。今までのインタビューや分析で、裏づけになるようなことはありますか？ 例えば、別に3回もやらなくても、1回やっておけば十分できたとか。あるいは、3回でも足りなかったとか。何かその辺のヒントは分かりませんか？

(木村 浩) 聞いてみると、確かに、3回ぐらいでようやく人となりが分かってきたので、専門家前で、「でも私は反対なんです」と言ってもいいなと思ったし、それを言えた、とおっしゃっています。

—— ただ、注意しなければいけないのは、木村先生が、「3回のフォーラムを見ていて、意見がぶつかるようなテーマでも大丈夫と運営側が感じたので、第4回にああいうテーマを持ってきたのですが、どうでしたか？」という聞き方をしているときが多かったような気がします。

(木村 浩) まあ、自発的にはそんな意見は出てこないもので、それはイエス、ノーで聞かざ

るを得ない項目で、これはインタビューの限界でもあるのですけれども。

(土田) まあ、その前提を明記すればいいと思います。

—— 会場の配置図について、詳しいことを教えていただきたいのですが、上の緑の丸は木村先生と総合ファシリテーターですか？

(竹中) そうです。

—— それで、サブファシリテーターはなぜ1グループに2名なのですか？

(竹中) 予行演習をやってみて、1名だと手が回らないなと思ったからです。

—— 書くのが足りないですよ。

(竹中) 今のような議論をしているときに、書きながら議論はできないので、話していることをサブファシリテーターの方が拾ってくださっているのですよ。それがサブファシリテーターの役割の1つなのですが、それを1人でやると、議論に追いつかないので。

—— 2名は多すぎませんか？

—— 多すぎなかったです。それでも間に合わないときもありました。

(木村_浩) たぶん、プロでも1人では無理です。逆に言うと、書けないからといって書かないと、記録されないし。特定の人だけ書いたら、「なぜ特定の人だけ書くんだ」という意見が出ますし。だから、やはり2人くらいいないと、物量が追い付かないです。

かといって、(参加者に)全部書けと言っても、書く技術がないですし、そこで時間が止まってしまうので、グループワークが動かなくなってしまう。

—— 進行をサポートする役割と、字を書くという役割があるので、両方を1人でやるのはかなり大変だということです。

(木村_浩) 実際にサブファシリテーターをやられた方から意見を聞いてみましょう。

—— 書き取った後、一応本人に確認もするのですよ。この内容で大丈夫ですかって。その間に、次の方の議論が来るので、1人では無理だったと思います。

—— サブファシリテーターが2人いるのは威圧感を感じるのではないかと思うのですが。それはないのですか？

—— 参加者のファシリテーターが、かなり自分でできる方だったら、2人いないかもしれないのですけれども、そういう方はほとんどいないのですよ。

—— サブファシリテーターが、どこまでサブするかですよ。

—— いや、ですからお隣で、時間ですよ、とか、次に進みましょう、ということを常にしなければいけないので。

—— アンダーコントロールですか？

(木村 浩) いえ、内容に関しては何のコントロールもしないけれども、ルールの順守という意味でコントロールをします。ルールに則ってやるのがブレインストーミングです、ということを確認して、そのためにサブファシリテーターを置きますということを言っただけから始めています。まあ、第1回はそれをしませんでしたけれども、第2回からはちゃんと役割を明確化して、やっていました。

—— 赤い紙に、「サブファシリテーターの役割は書くことです」というようなことを明記して、それを参加者に配布していました。

—— シンポジウムで首都圏参加者の方が発表されましたけれども、サブファシリテーターがいろいろ教えてくれてよかった、という感想があったのです。

実はその方は、第1回でいきなりファシリテーターに当たってしまったのです。で、まったく分からないまま、あなたがファシリテーターに当たりましたね、じゃあやりましょう、と言われて、こういうふうにするんですよと少し言われただけでやらなければいけなかった。

ちょうど私はその班でサブファシリテーターをしていたのですけれども、誘導をしてはいけないのは分かっているけれども、私がいろいろ言わなければ、おろおろしてしまって、何も進まないような状況でした。その方は、ファシリテーターという言葉も知らなかったわけですから。

—— 初回は、先ほどお見せした青い紙（グループワークの進め方）と赤い紙（ブレインストーミングのルール）もまだなかったのです。

—— なので、「じゃあ、次はこうしましょうか。そういうふうに言ってください」とセリフもつけて言ってあげないと、できないような感じだったのですね。

だから、ファシリテーターとは何かということも分からない方が来たときに、それを支えながら、皆さんの発言も書き取りながら、時間ですよと言いながら、ポストイットを分類してみてもどうですかと言いながら、というのが現状だったので、2人いましたよね。

(木村^浩) あと、威圧感という意味で言うと、第1回は確かに存在感が大きかったと思います。でも、回が進んでくると、はっきり言って、サブファシリテーターは半分無視されていましたから。かなり主導的に、参加者の中で議論を進めるようになったので。

でも、それでも最後まで2名は必要でしたよね？

—— お話があまり上手ではなくて、とつとつと話される方もいるのだけれども、流れるように話される方もいるから、そこからキーワードを拾って、確認を取って、訂正を加えて、ということに1人がかかりきりになっていたら、やはりもう1人、もう2人ほしいくらいのときもありました。

—— よく分かりました。

—— 今回のフォーラムは、参加者にとって、ファシリテーションの勉強になっているのですよね。おそらく、専門家の参加者も市民の参加者もどちらも含めてですけれども、6割くらいの方、すなわち、40代くらいまでの方は、自分の職場での仕事にこのファシリテーションのスキルが役に立ったという意識を持って、お帰りになったのだらうと思います。つまり、原子力のことをディスカッションしているのだけれども、参加者にとってみると、原子力のことについて知ったという面よりも、コミュニケーション、ファシリテーションについて勉強できた、という意識があるのではないかな。

企業経営でいうと、GEの幹部候補生の数ヶ月の教育のプログラムの中で、1ヶ月はファシリテーションの教育をするのですよ。要するに、ファシリテーションができなければ、会社の意思決定ができないと。それくらい重要なことなのですね。

で、最近の若い人たちは、そういうことを見聞きしているから、そんなことも頭の片隅にあったのではないかと思います。ですから、フォーラムが終わったときの挨拶の中で、いろいろなことが勉強できたという意味のことをおっしゃった方は、そういう収穫があったということと言いたかったのではないのでしょうか。

それは、我々のフォーラムが、原子力のことをとにかく教え込もうとしている活動ではないという意味でも、重要だったのかもしれない。それによって、原子力に対する抵抗感が薄れ、境界を乗り越えることに大きく役立ったのではないかと感じました。

—— 先ほど、ファシリテーターはくじ引きで決めたとおっしゃっていましたね。

—— 実は、全員が経験していないのですよ。偏るのですね。

—— 専門家の方も、ファシリテーターを務めることによって、学ばれているのですか？

—— 専門家の方も、半数ぐらいの方は、ファシリテーションを経験したことのない人とお見受けしました。ベテランの人とかは、過去に経験されたのだらうと思いますけれども。

それから、私の目から見ると、2、3人の専門家の方は、情報提供型の意識で参加されていたのだけれども、意識の変化が起きていましたよ。

—— これは土田先生にお聞きしたいのですが、情報提供型のリスクコミュニケーションに取り組んでいる方は、自分の持っているものを知らない人に提供しようとして、いろいろなことをされているのだけれども、上から目線のように感じるコミュニケーションのやり方になってしまうような方がほとんどなのですか？

(土田) それはオールドタイプでして。確かに、そういう方は必要なのです。特に、放射線の健康被害などについては、正しい知識をきちんと教えてくれる方が一定数必要なのですけれども、今我々が扱っているようなことと言えば、上から目線というような立場を取る人は、それこそ、ファシリテーションのトレーニングを受けていない、自称専門家ですね。

(木村^浩) 参加された方がどうだったかという、どうでしたか？

—— やはり、上から目線の人は、専門家の方に多かったですね。

(木村^浩) インタビューの雰囲気としては、ファシリテーションやディスカッションの仕方が学べてよかった、と言っていたのは、市民の方のほうが多かったような気がしていて、専門家の方はあまり言っていなかった気がしたのですが、一緒に立ち会っていた人はどう感じましたか？

—— 専門家の方でも、仕事場で使えそうです、と言った方はいました。

(竹中) まあ、そうおっしゃる方は、結構最初からできていた方でしたね。

(土田) 私もフォーラムに出て、見ていましたけど、自分を殺して、場を乱しても仕方がないなと思っているけれども、いつか自分を出したいと思っているような人もいましたね。

—— 若い方で、自己紹介もままならないくらい、プレゼンテーションの経験がほとんどないような感じの方がいましたが、第 5 回では立派な挨拶ができるようになっていて、たった 5 回のフォーラムを経験しただけで、あそこまで成長するのかと驚きました。だから、ファシリテーションと言わずとも、人と普通に話をするスキルのレベルでも、ずいぶん変わったと思います。元々お話が好きでお上手な方にとっては、そういうところの収穫はなかったのかもしれませんが、若い人たちは大収穫だったような気がしますね。

だから、人それぞれ、学んだことは違うと思うのですね。それを分析してみると面白い。一方的に知識を提供する場では、そういうものは出てこないでしょうから、そういうところがこのフォーラムの利点というか、参加者側のメリットだと思います。

(土田) ひとつ補足すると、最後のアンケートで、「説得されたと感じましたか」という質問を入れてあったのですね。今手元に資料がないので、正確なことは言えませんが、説得されたと感じたという答えはあまりないです。だから、結果として、上から目線で押しえつけられたという印象はあまり持たれていなかったと思います。

—— この手の話をやると、専門家の人たちは市民の人たちの実質を知って、鎧を脱ぐのですね。それがひとつの気づきになると思います。一方で、市民の人たちは、経産省の役人みたいな人をイメージして、ああいう人が専門家だと思っていたけど、実際に話してみたら、ああ、普通の人だなと感じる。これはこれでひとつの気づきだと思います。一言で総括するならば、話せば分かる人たちだな、あるいは、対話の喜びを知る、そういうことだと思います。だけど、これは極めて予定調和的な話で、何の面白みもない。参加された 20 人の人たちにとっては大変よかったと思うのですけれども、基本的には自己満足ですよ。

この手の取り組みで日本で最先端を走っているのは、大阪のコミュニケーション・デザイン・センターであり、それを踏まえた実践編では、東北の北村先生などがトップランナーとして走っていると思います。その人たちの悩みは、20 人の自己満足を、どうやってかける 2、あるいはかける 100、あるいはかける 1 万にできるか、ということです。今回のような取り組みを、かける 2、かける 3 ぐらいまではできます。だけど、1 億分のたった 20 人、あるいは 100 人、頑張って 200 人止まりなのです。それを彼らは悩んでいます。

—— 同じようなことを谷口先生もおっしゃっていました。ただ、今までの取り組みは、北村先生にしても、INSS にしても、知識提供型のリスクコミュニケーションをしているのです。それが、このフォーラムは完全に双方向で、知識提供はゼロにしているわけです。

ゼロでよかったかどうかという議論はこれからあるのだけれども、今までのリスクコミュニケーションと、そこに非常に大きな違いがあります。

今おっしゃられたように、今までの取り組みと同じような気づきが出ているのだけれども、知識を提供していない。北村先生も大変すばらしい活動をなされているけれども、一緒に原子力のリスクについて語っているわけですよ。それは、今回の取り組みでは一切やらなかったですから。

—— 自己満足というのは私はちょっと言いすぎだと思うのですけれども、それでも、今回の活動も草の根のひとつであるという点は変わらないですよ。こういうことをやったということが発信されて、それを見聞きしている人もいるわけだけれども、それでいいのか、というところだと思うのです。双方向だといいいながらも、こういうことをしました、と発信する程度のレベルであって、それがわっと全国に広がるほど期待が持てるかということ、すぐには難しいだろうと。まだまだ、もっと何かいい手はないかと、こう考えるわけです。

—— 前提に関しては、確かに、少し新規性があると思います。

我々も、他の人と同じように、2時間目に直面している、ということだと思うのです。他の人が直面しているのと同じような課題に立ち向かわなければいけない、ということです。

—— 今までのリスクコミュニケーションとこの取り組みの根本的な違いは今お話しした通りで、それがどういう意味を持つかということ、例えば北村先生の取り組みは、北村先生や八木絵香さんがいないと成立しないのですよ。じゃあ北村先生って何人いるの、という話になって、もうそこに限界があるわけです。

ところが、この取り組みは、ファシリテーションのスキルを持った人たちは必要だけれども、原子力の知識に精通した専門家を必要としない。原子力の知識に精通した人がそれを伝えていくというようなことは一切していないのにも関わらず、第5回フォーラムのまとめは、政府の有識者会議でまとめたようなものとそんなに変わらないですよ。立派なまとめになっているのです。知識豊富な人を高い謝金を払って集めなければできないような話が、一般市民の人に、しかも何も知識を提供しなくても、できてしまうということに、私は驚きましたね。

—— そこは強みのようですね。そこが一番、2時間目の戦略として有効かもしれない。

(木村^浩) そういう意味では、しっかりと場のルールを決めてやるということに、何か意味があるのかもしれませんが。

—— 先ほどの竹中さんのプレゼンにあったように、第4回では、参加者に調べてもらっているわけです。今はもうインターネットの社会で、ほとんど完璧な情報が集まりますから。私はその資料を見ましたけれども、100%とは言わないけれども、8割方の情報は、皆さんがピックアップしてきているのですね。だから、専門家が力みかえってプレゼン資料を準備する必要はないのではないかという気がしますね。

—— ただ、やはり専門家は何をすべきか、というのもひとつありまして。

例えば、福島で、市民の人から電話相談が来ているのですよ。それに対応している人は、地元の人なのです。素人なのです。まあ、そういう会社に所属したオペレーターという肩書きの方ではあるのですが。専門家が、その人たちを教育をするのですよ。1ヶ月くらいの、放射線に関する詰め込み教育をして、そして、その人たちが地元からかかってくる電話の対応をするのです。

専門家が地元の人たちと話をするのではなくて、クッションとして、一種のファシリテーターだと私は思っているのですが、そういう方が対応をする。最初はごちなくて、専門家と代わることもあったのですが、そのうち代わらなくなってきました。その方たちが、一生懸命勉強しながら答えているのです。そういうことを見ていると、これはすごいなと思ったのですよ。

そのときに、専門家が、「もういなくてもいいですね」と言ったら、「いや、ちょっと待ってください」と。どうしてもいないといけない。だから、影にいて、相談を受けるだけになっているのですけれども。

専門家は、そういうこと、つまりファシリテーターを育てることに注力して、そしてそういう場を広げていくことが一番大事だと思います。

ただ、残念なことに、その電話相談は、国の予算がついていて、コレクトコールでいくらかでも電話をかけられるから、たくさんの方が聞いてくるのです。予算が潤沢にあるようなシステムでやっているから、そのままどこでもやれるというわけではない。放射線の相談は、放医研もやっているし、他にもいろいろなところでやっているのですけれども、コレクトコールではないから、そのうちお客さんが来なくなって、もう店じまいを始めているのですね。

—— 原子力学会もちゃんと受け付けています。私も対応しましたけれども、山のようにたまっていますよ。

—— 私が言いたいことは、専門家がファシリテーターをどう増やしていくかということを考えることで、自己満足で終わらず、もっと広がっていき余地があるのではないかと、ということです。

(土田) やはり、学会員は専門家か、というところに関わってくると思うのです。専門家とは何か。昔流の考え方でリスクコミュニケーションができるかということ、やはり北村先生みたいに、それなりに見識を持って、正確な知識を持っている方に限定されるわけです。私も原子力学会に足を突っ込んでいるので、つらつら見るに、そういう方が原子力学会の中に一体何人いるのかということ、そういるわけではない。

一方、このフォーラムは、原子力学会員だったら誰でもよかったのです。そこが、今までのリスクコミュニケーションと違うところです。そこをこれから議論して突き詰めていけば、何か解が出てくるように思いますけどね。

—— 一般市民は確かに1億分の10ですね。専門家から見れば、専門家の範疇は難しいけれども、2万分の10なのです。そちらのほうが全然大きい。

—— 専門家の教育が一番簡単なのですよね。

—— 専門家の教育とか、専門家の意識変化とか。そのほうが大きいのですから。

—— 大学でそれをしていけば、これからそういう専門家が育つ。

(木村 浩) それから、専門家の定義というところで言うと、実はそういうレッテルの下で活動をしていると周りからそう見られる、という認識が、当事者にあまりに低すぎる、という問題があります。

だから、「ムラ」という言葉をあえて言って、境界とあえて言って、ムラの外か中かという議論をさせると、最初は専門家は皆、自分をムラの外に置きたがるわけです。私はムラの外にいきたいから、まずはムラの定義をしろという人たちが多いのだけれども、話していくと、「ああ、自分もやっぱり中の人なんだ」、あるいは、少なくともそう見られるということに納得して、行動ができるようになる、というところがあったのだろーと思います。

ですから、専門家の定義をどうするか、というよりは、周りから見たときに、自分はどう側に見えるのだろうか、ということのほうが大切で、専門家と呼ばれる人たちのその認識があまりに低すぎる。そこに私は問題があるなと思っています。

—— 国の政策決定をする人の動きを見ていると、まさに同じですよ。

—— 私も会社において、説明する人は電力、それから政府の人ということで、いかに自分たちが仕事をうまくやっていくかということに対しては、そういう人としか話をしないので、原子力についてどう思っていますかということに関して、普通の人とお話をするということに、一般企業の人もまだまだ興味がないというのは会社においても感じています。

専門家の中でこういう活動をしていますよということを社内に発信していくのも重要で、保物学会から出ている本の新刊紹介を書いたのですけれども、そういうこともとても勉強になると思いますので、今後専門家が発信していく力をつけていくひとつのいい材料になるのではないかと思います。

あと、竹中さんの資料について質問があるのですけれども、この資料をまた使うときがあるのでしょうか？

(木村 浩) 公開するときは、ホームページに載せます。

—— 単純に思ったことですが、参加者は10名、10名ですね。第3回のテーマは投票で決めたと思いますが、スライド21を見ると、ピンクと青の付箋が15枚ぐらいずつあるのですけれども、人数と数が合わないの、どういう選定方法で決めたのか、教えていただけますか？

(木村 浩) ここに書いてあるのは、投票結果ではなくて、テーマ案です。テーマ案は1人何枚でも書いていいので、10枚以上あるのです。

その上で、これらのテーマ案を見て、投票をしてもらいました。投票は、1人1票です。で、その票が、どの部分に入るかというのを見て、関心の部分に6割ぐらいの票が集まったということを決めているということです。

—— では、1人の人の意見が多く出ているとか、そういうわけではないのですね。

(木村 浩) そういうわけではないです。

他はよろしいでしょうか。

そうしたら、最後に、シンポジウムで実施したアンケートの結果を少しご紹介して、終わりにしたいと思います。さっと見てみたところ、基本的には満足したという人たちがほとんどでした。他の取り組みでもこういうシンポジウムはよくやられるけど、それよりも、中のことを詳しく説明してもらって、フォーラムのイメージがよく分かりました、というご意見もありました。説明者の方、どうもありがとうございました。意図がうまく伝わったかなと思います。

あと、やはり、今後どうするのか、どう展開していくのかというところで、具体的に使えるものになることを期待したいですというご意見が非常に多くありますので、そういうことを念頭におきながら、研究を進めていかないと、な、と思っています。

あとは、ダイナミズムの分析はこれからやりますけれども、その辺からも何か分かってくることのあるのではないかと考えていますので、次の業務推進全体会合でお知らせできるところがあれば、お知らせをして、またディスカッションをさせていただければと思います。

ますので、よろしく申し上げます。

ということで、ちょうど時間ですけれども、何かありますか？

—— この会議の席順が、見事に傾斜配分になっているのですよね。何となく、こちら側が偉い人というか。次回は、例えば、ツートップである木村さんと土田さんはあえて離れて座るとか、ばらしたほうがいいかなと思います。

(木村 浩) 分かりました。くじ引きにするとか、いろいろ考えましょう。

それでは、これで第2回を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

以上